平成１６年度第２回日本生物物理学会運営委員会議事録

日時：２００３年１２月１３日（土）１３：００～

場所：早稲田国際会議場４階共同研究室 No.6

出席者：石渡会長、美宅副会長、難波副会長、有坂、栗原、諏訪、永山、三木、薬師、宇高、石島、金城、国岡、安永、若杉、各運営委員、阿久津会誌編集委員長、清水支部長（東北）、森島年会(H16)実行委員長、新田年会(H17)実行委員長、河合秘書

報告事項：
（１）平成１５年度年会総括報告
美宅平成１５年度年会実行委員長より資料（報１：決算報告（収入及び支出））に基づき説明がなされた。日本生物物理学会第４１回年会は、２００３年９月２３日～２５日の期間、新潟市の朱鷺メッセで開催された。年会の参加者は、１４４２名、懇親会参加者は６４９名であった。新潟県からの補助金は７００万円あった。収入は 31,281,896 円（学会からの準備金１５０万円含む）であり、支出は 33,387,905 円であった。準備金１５０万の内、５０万はかえってこなくてもいいお金のため、実際の赤字は約３１０万円となる。３１０万円の請求書をまわすことで了承された。
Q. 次回以降このような場所ではできないのでは？
A. 赤字が最初から見込まれれば、参加費をあげる必要がある。あのような所でやることを前提に、参加費について議論する必要がある。例えば、参加費を２０００円上げると赤字がなくなる。
＜問題点＞ 新潟コンベンションサービスの会場設営費、運営費はかなり大きく、改善する必要がある。設営、運営をアルバイトに頼ることができるか。アルバイトの活用、どう使うかが問題である。

（２）平成１６年度年会準備状況
森島平成１６年度年会実行委員長より年会準備状況の報告がなされた。
日時：２００４年１２月１３日（月）、１４日（火）、１５日（水）

場所：国立京都国際会館
１１月２６日の年会準備委員会で話し合った内容について説明があった。
・シンポジウムが２４件、ランチョンセミナーが１０件行われる。
・本来ならオーラルプレゼンテーションがメインの年だが、会場の関係でオーラルプレゼンテーションは無理であり、シンポジウムとポスターがメインである。
・ポスターのプレビュー（１分間）を検討したが、ポスタープレビューはしない方向で進めている。
・ポスターを張りっぱなしにすることは会場的に無理であり、一日ごとにポスターを張りかえる。
・新潟の学会同様、企画されたシンポジウムで欠けた分野に関しては「ポスターから選ぶシンポジウム」を行う予定である。
・男女共同参画シンポジウム枠を一つ用意している。
・企画シンポジウム委員が「１０年後の生物物理：萌芽的研究手法」ということでシンポジウムを検討している。
・市民向けシンポジウムを第３日目１５日（水）１３時～１５時に設定してある。
・会場費はトータルで１０００万円かかる。会場の施設利用費が非常にかかるため、特定領域研究など会場費を支払えるシンポジウムを交渉することを考えている。森島委員長より運営委員に対し会場費をサポートできるシンポジウムを公募の中から選択してほしいとの要望があった。
・ランチョンセミナーを充実させたい。
・赤字をできるだけ減らすように努力する。
・参加費を上げる必要があることで皆、意見が一致した。必要な費用を試算し、見積もりを早急にメールなどで皆に伝えることになった。
・予稿集登録システムを京都でも採用することを決定している。タイムスケジュールを現在作成中である。学会予告を６月号に掲載し、予稿登録の〆切を７月中旬以降とする。プログラム作成時期は８月上旬である。ホームページ等も作成予定である。４月の運営委員会で話し合う。

（３）平成１７年度年会準備状況
金城委員、新田委員から平成１７年度年会について説明があった。

日時：２００５年１１月２３日、２４日、２５日
場所：札幌コンベンションセンター

（４）３年以上会費滞納者の自然退会について
３年以上会費を滞納者している会員のリスト（資料：報４）が配られ、栗原委員より説明があった。この中で、知人、間違いと思われる方に気付いた場合、事務室河合さんまで申し出るよう要請があった。この会員リスト（資料：報４）に所属が書いてある方が便利との要望が出され、次回から、リストに所属をつけることに決まった。

（５）生物科学学会連合連絡会議報告
生物科学学会連合（２１学会からなる連合）の連絡会議での提出した提言（教科書問題、生物学国際高等コンファレンス、研究体制、教科書 WG など）について石渡会長より資料（報５）に基づいて説明があった。

（６）第４回東アジア生物物理学シンポジウム
・永山委員より第４回東アジア生物物理学シンポジウムの報告が資料（報６）に基づきなされた。全参加者は４５０名であり、このうち日本人は５０名であった。
・「東アジア」の名前は変えない。正規の参加国は、日本、中国、韓国、台湾、香港であり、インドとオーストラリアはオブザーバーとして認め、参加を呼びかける。

（７）男女共同参画学協会連絡会報告
・国岡委員より、男女共同参画学協会連絡会の報告がなされた。１０月７日に男女共同参画学協会連絡会の設立１周年記念があった。生物物理学会で１つポスターを出し、学会保育室の設置、男女共同参画若手問題検討委員会発足予定についてふれた。
・１１月１０日〆切の学協会アンケートに対し web で８１７人の解答があった。３５００名の 23.34%に相当する。これから、解析を行い、解析結果を３月にまとめる。生物物理学会分の回答結果の利用について今後議論する。

（８）オンラインデータベース・J-Stage2 の現状報告
安永委員より、資料（報８）に基づき、オンラインデータベース・J-Stage2 の説明会、講習会の気になった事項（J-Stage の完成度；対応文書フォーマット；電子投稿、査読、公開システム；学会年会のアブストラクトに関しても投稿のツールを提供、アブストラクトの公開；J-Stage2 へのアンケート）について説明がなされた。
・現在会誌は J-Stage であるが、来年２月から J-Stage2 にかわる。
・J-Stage から J-Stage2 への公開に関しては問題ないが、それ以外に関しては将来的に不安である。
・J-Stage は JST がやっている。メリットとしては、海外との接続を中心にしていることと（和文でもある）、サーバーが無料であることをあげることができる。J-Stage2 からは 横断的検索が可能になる。
・J-Stage に関しては技術的には問題があるが、日本で開発したシステムを利用した方が国益にもなるのでいいのではとの意見が出された。

（９）広告獲得キャンペーンについて
有坂委員より、生物物理会誌の広告獲得のお願いに関する資料（報９）をもとに説明があった。少しずつ広告が減ってきており、広告が足りないので、斡旋し、有坂委員あるいは河合さんまで連絡するようにとの要望がなされた。

（１０）協賛依頼について
石渡会長より第９回けいはんな分子生物物理学国際会議の協賛（資料：報１０）について説明があり、了承された。

（１１）生物物理学研連報告
平成１５年７月１５日の生物物理学研連連絡委員会の議事録（資料：報１１）の説明が石渡会長よりなされた。

（１２）出版委員会報告
美宅副会長より資料に基づき出版委員会の報告がなされた。
英文のジャーナルを会誌に付け加える。葛西編集委員長を中心とした英文誌編集委員会を立ち上げ、Editorial Board などの編集体制を決定する。和文誌と

同様に予算を含めた基本方針は、運営委員会及びその下部組織の出版委員会において定める。編集委員会は基本的にメール等によるオンライン編集委員会とする。英文誌のフォーマットは、発刊当初は他誌のものにならい、発刊に関わるコストをできる限り削減する。公開サーバとしては、J-Stage2 が望ましい。

（１３）男女共同参画・若手問題検討委員会報告
三木委員より、本日午前中に行われた男女共同参画・若手問題検討委員会の報告があった。この委員会は、三木委員長、栗原、諏訪、薬師、宇高、国岡、若杉、各運営委員、阪大蛋白研中川の８名より構成される。
・共同参画に関しては、学会としてどういう具体的な問題があるか、どういう具体的な改善策を提案できるかにしぼって議論していく。具体的には、雇用問題（育児休暇）、研究費、保育援助などについて話しあう。次回の京都年会では、男女共同シンポジウムを企画する。（このシンポジウムの枠は、他のシンポジウムと同じ時間帯にある。）
・若手問題に関しては、今後、ポストポスドク問題、任期性について検討していくことに決まった。
・会長より若手奨励賞（対象は博士課程学生、ポスドクなど（もう少し上でもよい））について提案があった。賞をあげるメリット（若い人のキャリアーアップ）、デメリットについて説明があった。選考方法などは重要であり、客観性を持たすうえで、論文賞、発表賞などがいいのではという意見が出された。また、Impact Factor の高い論文だけで評価するのではなく、例えば放射光のビームラインの整備など論文でははかりえないサイエンスの分野にも受賞の機会を与えるよう配慮してほしいとの要望があった。

（１４）その他
石渡会長より、名誉会員の推薦基準を変えるために片岡氏にその原案を作ってもらっており、会長だけではなく推薦できるようにしたいとの方針が述べられた。

議題：
（１）会員異動システムについて
財団法人日本学会事務センターの担当者服部氏が来られ、会員異動システムに

ついて資料（議１）に基づき説明がなされた。会員はインターネットを通じて、学会ホームページより日本学会事務センターが提供する会員異動ページを選択し、事前に付与された ID・パスワードを用いて、登録情報確認ページや更新ページを選択することにより、登録状況の確認や更新手続きが可能となる。登録情報の更新後、登録している電子メールアドレスに対して確認メールを送信し、更新内容の確認を再度促す仕組みとする。
・Web サーバーに会員のデータをおき、そのデータにアクセスし、更新する。３月より稼動予定である。
・パスワードを発行、郵送する。郵送は実費とする。まず一方的に任意のパスワードを与える。パスワードの変更に関しては検討課題である。最初は一方的でしょうがないが、後で、会員は好きにパスワードを変更できるようにしてほしいとの要望が出された。
・今までどおり、葉書郵送、FAX などでも変更できる。
・海外からは今までと同様、郵送のみで行う。

（２）次期会誌編集委員・地区委員の選出
美宅副会長より、次期会誌編集委員・地区委員の選出結果に関し説明があり、、承認された。（推薦人数、分野の偏りを考慮し、また、アカデミックにかたよらず企業の人も入れるべきであるとの意見も考慮された。）
編集委員：曽我部正博（名大医）、安藤敏夫（金大理）、津本浩平（東北大工）、四方哲也（阪大工）、長濱辰文（神大理）、黒木良太（キリン）
地区委員：北海道　渡辺信久（北大）、東北　清水俊夫（弘大）、関東　安田賢二（東大）、中部　神取秀樹（名工大）、北陸　水上卓（北陸先端）、関西　西山雅祥（京大理）、中国　宮澤淳夫（理研播磨）、四国　宇高恵子（高知大）、九州　池水信二（熊大医）

（３）平成１６年度分野別専門委員の決定
安永委員より、平成１６年度分野別専門委員に関する資料（議３）が配られ、説明がなされた。A-2: 片平正人、C-28: 濡木理、D-17: 安田賢二、A-7, C-2, D-28 は留任。承認された。

（４）オンラインデータベース・J-Stage1 から J-Stage2 への移行作業日程

オンラインデータベース・J-Stage1 から J-Stage2 への移行作業日程について安永委員より資料（議４）に基づき説明があった。
・１２月号の発行は J-Stage1 にて公開し、２月号の発行は J-Stage2 にて公開予定である。２月までに J-Stage1 から J-Stage 2 への移行を完了する。（２月末以降 J-Stage1 はとまる。）
・J-Stage2 の公開後は内容の変更ができないことを学会側で最終確認。
上記の点が承認された。

（５）平成１６年度会誌の印刷部数
安永委員より、来年度会誌の印刷部数は３７７０部ｘ６刊 ＝ ２２６２０部、予稿集は４０００部との報告があり、承認された。

（６）平成１６年度会誌表紙・入会葉書の印刷部数
安永委員より、表紙も同数（３７７０部ｘ６刊　＋　予稿集４０００部）Ｘ1.2＝３２０００部（表紙の刷りなおしはきかないので余裕を持って 1.2 倍とした）、入会葉書は４０００部との説明があり、承認された。

（７）平成１６年科研費審査委員候補者選挙公告
平成１６年科研費審査委員候補者選挙公告の文面（資料：議７）について石渡会長より説明があり、承認された。但し、以下の点を修正することになった。
窓口研連、関係研連とは何か、また、５つ、７つの細目は具体的にどれかについての説明を加える。キーワードを加える。細目ごとに番号をつけ、推薦する人にも番号をふり、対応づけを試みる。（但し、そのまま反映されるとは限らない。）

（８）平成１７・１８年度学会委員候補者推薦について
平成１７・１８年度学会委員候補者推薦の文面（資料：議８）について石渡会長より説明があり、承認された。

（９）会誌出版について
美宅副会長、安永委員より、会誌出版について説明があった。
・英文ジャーナルを会誌につける。

・出版社の選択としてはサイペックあるいは中西印刷の二つに絞っている。二つの会社の比較が、オンライン投稿・査読システム、オンライン投稿の投稿規定、英文誌のフォーマット、出版の実績、電子化への技術に関してなされた。その結果、中西印刷で問題ないのではないかという結論になった。しかし、危惧するところもあるので、そこを最終チェックし、１月末に具体的な報告をメールで連絡することになった。２月、３月で具体化させていく。
・JB が中西印刷から海外の印刷会社へ移した理由を調べる必要があるとの意見がだされた。

（１０）第５回東アジア生物物理学シンポジウムの開催について
永山委員より、２００６年に沖縄で開かれる第 5 回東アジア生物物理学シンポジウムについて説明がなされた。
生物物理学会でサポートするかどうか、早い段階で委員長を決める必要がある。参加は自由にした方がいい。そうすれば、IUPAB から５０００～１００００ドルの援助がでる。
・話し合いの結果、第 5 回東アジア生物物理学シンポジウムを２００６年秋の学会と一緒に沖縄でやる方向で検討するよう、難波副会長にお願いすることで合意した。東アジアの拠点としての沖縄をアピールでき、沖縄の取り組みとしても絶好の機会として皆賛成した。使用する施設として、沖縄大学院の建設が間にあうかどうか問題であるが、柿落としとして国の援助を期待できる。

連絡事項：
次回運営委員会日程について
４月１０日（土）１３：００～　早稲田国際会議場

以上（書記：若杉　桂輔）